

大淀川右岸地区 畑かんマイスター

(有)川越農産 川越清一郎さん

田野町七野八重台地に施設きゅうり3棟68a(耐候性ハウス)、施設日向夏3棟46a(果樹AP2号強化型)、夏季には露地にがうり20a栽培を行っています。大淀川右岸地区の水利調整委員も努めていらっしゃいます。

施設きゅうり栽培における収量・品質の確保



- 施設きゅうりは長期つる下ろし栽培。苗は全てJAより購入。6m間口に3ベット、株間50cm、1条植え。
- 施設きゅうりでは点滴かん水チューブを1ベットに3本を片道設置。2本と1本でコックをつけ、3月までは2本利用。かん水時間を細かく調整し病害の発生を抑制しています。
- 株元かん水と併せて、ハンガータイプの頭上マイクロスプリンクラー(6m屋根に1列4m間隔、散水直径8m、吐出量5ℓ/分)と細霧噴霧を利用。特に細霧噴霧でセンチュウ被害による萎れ軽減を図るなど6月まで収穫期間の延長に取り組んでいます。
- かんがいの水は約23℃まで加温し冬期の低水温(H24年1月上旬調査:7.6℃)の根域への影響を和らげています。

○5月のかん水は3本全てのチューブを利用し、30分(約2ℓ/株)かん水を1日あたり3回実施。また、10分間断続での細霧噴霧を併せて実施しています。



点滴チューブ3本利用トリッパ-間隔20cm



細霧噴霧
(ノズル間隔1.5m、動噴圧力0.4MPa)

田野町での施設日向夏栽培

- H20年度に4戸の農家で田野町内で初めての施設日向夏を導入しました。
- 果実肥大や樹勢の維持強化のために施設日向夏では株元には25mm塩ビパイプ(ノズル間隔50cm)と頭上マイクロスプリンクラー(きゅうりハウスと同仕様)を設置しています。
- 特に日焼け果対策として頭上スプリンクラーの活用を研究したいと考えています。



株元と頭上にかん水機材を整備

露地にがうりでの水の利用

- 露地にがうりを夏場の労力配分のために導入しています。
- オーバル(扁平)形状のポリエチレンパイプ(ノズル間隔30cm)を利用しています。耐久性や散水の均一性は良好ですが、かさばるため保管や取り扱いし難いことが難点です。

○きゅうりハウスに二酸化炭素発生装置を導入し良好な生育を得ることができました。今後もデータの分析や栽培技術の研究を重ねながらきゅうりの安定生産に取り組んでいきたいと考えています。



露地にがうりにオーバルパイプを利用